

〈書 評〉

御子柴善之

『カント 純粹理性批判』（シリーズ世界の思想）

（角川選書、2020年）

滝沢 正之

本書は、ユニークな発想のもとで執筆された『純粹理性批判』の入門書である。手にしてまず驚かされるのは、全体で800頁近くある、その物理的なボリュームである。もちろん文字の大きさの違いはあるが、この頁数は PhB 版の『純粹理性批判』とあまり変わらない。このことだけからも、本書が、分厚い本体を敬遠して手軽な入門書を開くというような、ありきたりの読書の姿勢を想定していないことがわかる。ジャンルが入門書であることから、この書評では、本書が与える説明や解釈の妥当性について検討することはしない。そうではなく、本書の入門書としての試みがどんな特色をもつのかについて、紹介をしていきたい。

古典と呼ばれる哲学書の多くは読みづらい。そのなかでも、『純粹理性批判』の読みづらさは別格のものである。それでもなお、この著作が専門の研究者以外にも読まれるべき価値をもつとするならば、そこで求められるのは入門書となるだろう。

さて、入門書にはさまざまな種類がある。ここでは、二つの種類の入門書を対比させてみよう。ある種の入門書は、元の古典的なテキストの代替物として読まれるべく執筆される。一般読者は難解な本体に歯が立たないので、本体のかわりに簡易版を読んでもらおう、というわけだ。これはいわば、代替物であることを目指した入門書である。しかし、別種の入門書もありうる。あくまで元のテキストを読んでもらうことを目標に置いて、読者をその段階まで導くことを目指すものである。こちらは、代替物となることではなく、誘導路となることを目指していることになる。そして、本書は、後者の方向性を目指すものである。「おわりに」の冒頭にあるように、「本書は『純粹理性批判』を手にとって実際に自分で読んでみようとする人のための本」(754頁)なのである。

『純粹理性批判』それ自体に読者を導くために、本書はいくつかの試みを行う。「はじめに」でとくに言及されているのは以下の三点である。「第一に、眼前のカントの文章から目を離さないようにします」。「第二に、『純粹理性批判』の構成に従って解説を進行させ、しかもできる限りスキップすることのないようにします」。「第三に、『純粹理性批判』には大変多くの先行研究があります。[…中略…]しかし、本書ではそうした先行研究に依拠した記述をしないように気を付けました」。(5頁)これらの三点について、少々詳しく述べておこう。

順序を変えて、まず第二の点に目を向けよう。本書は、『純粹理性批判』をその構成に忠実に、全体として紹介する。『純粹理性批判』には200年以上の解釈の歴史がある。そのなかで、繰りかえし議論の対象となる箇所と、そうではない箇所とが分かたれてきている。多くの入門書は、その歴史的な評価を前提にして、言及する箇所を選択して執筆される。料理で言えば、食材の食べにくい部分や味の良くないところは捨てて、美味しそうところだけを使う方針を取るのである。

しかし、本書の方針は異なる。本書は、カントのテキストそれ自体を尊重して、既存の入門書が無視あるいは軽視していた箇所についても遺漏なく目配りをする。たとえば、入門書では切りすてられがちな「超越論的方法論」にたいしても、多くの紙幅を割いた紹介が与えられる。また、

全体の構成に注意を喚起しながら解説を行うことも特徴である。本書は、錯綜した目次の構造をわかりやすい図にまとめ、節目ごとに読者にこれを想起させ、これから紹介する議論が著作全体でどのような役割を課せられているのかを確認しつつ、話を進めていくのである。

つづいて、第一および第三の点について触れよう。本書は、論点ごとに『純粹理性批判』からの引用を行い、それに添って説明を与えるというスタイルを徹底させている。さらに、本書は、そのさい、既存の解釈に可能なかぎり言及しないようにする。このことを、著者が自らの解釈のみを示して、他の解釈の可能性を読者に見せずにいる、と解するのは適切ではない。この態度は、本書が説明において意識的にストイックであろうとしていることの現れである。すでに述べたように、本書は読者をカントのテキストそのものに向かわせようとする。引用されたカントのテキストを読みとく主体は、あくまで読者本人であるとして、本書はその手助けに徹しようとする。先行研究への言及は、読者に先入見を与え、テキストとの直接的な対話の妨げになるがゆえに、避けられるのである。

このように、本書は、『純粹理性批判』という食材を、余すところなく、なるべく素材のままの味で提供しようとするのである。

さて、説明における禁欲さに言及したが、もちろん、このことは、本書の与える説明が貧しいことを意味していない。それは、冒頭で言及した総頁数からもわかろう。重要なのは、与える説明の種類である。

本書は、そのままでは読みづらい『純粹理性批判』を、さまざまな工夫をこらして解きほぐしてくれる。周知のように、『純粹理性批判』はひどい悪文からなる。本書は、これを噛みくだいて読める文にしてくれる。また、『純粹理性批判』は繰り返しが多く冗長であり、議論の文脈が見失われやすい。しかし、この欠点もまた、重要な箇所を選んで引用することと、全体の構成に頻繁に言及する工夫とにより、大きく緩和されている。これにより、そもそもカントのテキストの意味がわからない、というたぐいの読みづらさは、かなり解消されている。

問題は、ここに至ってもなお、『純粹理性批判』には別種の読みづらさが残ることである。それは、カントの哲学的主張の受けいれがたさに由来する読みづらさである。その主張内容は理解できたが、さすがに常識的な世界観からかけ離れすぎていて、付された正当化の議論を踏まえてもなお、納得できない。このような反応は、カントを専門としない研究者が、たとえば超越論的観念論にたいして見せるものとして、ありうるものであろう。そして、一般的な入門書は、こちらにたいしても、なんらかの対応を用意しようとする。たとえば、哲学的な文脈を補ったり、再構成的な解釈の例を示したりと、解説をさらに重ねようとするのである。

本書の禁欲さが発揮されるのは、ここである。上に挙げたようなたぐいの解説は、読者がカントのテキストに直接的に対峙することを妨げかねないものとして、ごく控えめのものに留められている。ここには、『純粹理性批判』それ自体と読者にたいする強い信頼が見てとれる。一般読者であっても、適切な仕方で向かうならば、カントのテキストそれ自体から価値を引き出すことができるはずだ。この信頼があるからこそ、本書は説明が過剰になる手前に留まることができるのであろう。もちろん、もしも読者がこういった姿勢をストイックにすぎると感じるのであれば、なにか別の入門書を本書と組みあわせて読むこともできる。本書は『純粹理性批判』の記述に忠実であろうとするので、たいていの入門書と上手く噛みあう。この点も含めて、本書は、これから『純粹理性批判』を学ぼうとする者にとって大きな助けになる一冊であると言えるだろう。